

山姥

詞章

登場人物

前シテ・里女 後シテ・山姥 シテ連・遊君百魔山姥
ワキ・遊君従者 ワキ連・遊君従者 間狂言・境川の里人

ワ・連 善き光ぞと影頼む。善き光ぞと影頼む。仏の御寺尋ねん。

これは都方に住まひ仕る者にて候。これにわたり候御方は。都に隠れもましまさぬ百魔山姥と申す遊君にて御座候。山姥の山廻りするといふ事を。曲舞に作り御謡ひ候により。京童の異名に百魔山姥と附け申して候。御親の十三年に當らせ給ひて候程に。善光寺へ御参りありたき由仰せ候間。我々御共申し。只今信濃の国善光寺へと急ぎ候。

ワキ連 都を出でてさぎ波や。志賀の浦船こがれ行く。末は有乳の山越えて。

袖に露散る玉江の橋。かけて末ある越路の旅。思ひ遣るこそ遙なれ。梢波立つ汐越の。梢波立つ汐越の。安宅の松の夕煙。消えぬ浮身の罪を斬る弥陀の剣の砺波山。雲路うながす三越路の。国の末なる里間へば。いとど都は遠ざかる。境川にも著きにけり。境川にも著きにけり。

ワキ 御急ぎ候程に。これははや越後と越中の境川に御著きにて候。これより道二つある由申し候程に。宿の亭主に尋ね申さうずるにて候。善光寺への路次の様体尋ね申して候へば。道二つある由申し候。一つは上路（あげろ）越えと申し候は。己身の弥陀唯心の浄土に譬へられたる道にて候が。但し御乗物の叶はぬ由申し候。

シテ連 げにや常に承る。西方の浄土は十萬億土とかや。ここはまた弥陀来迎の直路なれば。上路の山とやらんに参り候べし。とても修行の旅なれば。乗物をこれに留め置き。徒跣（かちはだし）にて参り候べし。道しるべしてたび候へ。

ワキ あら不思議や。未だ暮れまじき日にて候が俄（にわか）に暮れて候はいかに。
シテ なうなうお宿、参らせうなう。

シテ これは上路の山とて人里遠き処なりお宿参らせ候はん。

ワキ これは初めて善光寺へ参る者にて候が。行き暮れ前後を忘れて候所に。嬉しくも承り候ものかな。さらばこれへ参り候。

シテ 今宵のお宿参らす事。取分き思ふ子細あり。承り及びたる山姥の歌の一節謡ひて聞かせ給へ。鄙の思ひ出と思ふべし。其の為にこそ日を暝（く）らし。お宿をも参らせてこそさむらへ。いかさまにも謡はせ給へ。

ワキ これは思ひも寄らぬ事を仰せ候ものかな。誰と御覧ぜられて山姥の歌の一節と御所望候ぞ。

シテ いや何をか包ませ給ふらん。あれにましますは百魔山姥にてはさむらはずや。まづ此の歌の次第とやらんに。よし足曳（あしびき）の山姥が。山廻りすると作られたり。あら面白や候。この御名は曲舞によりての異名にてわたらせ給ふ。さて真の山姥は何と知し召されて候ぞ。

ワキ 真の山姥は山に住む鬼女とこそ曲舞には見えて候へ。

シテ 山に住む鬼女とは女の鬼とや。よし鬼なりとも人なりとも。山に住む女ならば。妾（わらわ）が身の上にてはさむらはずや。年頃色には出させ給ふ言の葉草の露程も。御心には懸け給はぬ。恨み申しに参りたり。

曲舞Ⅱ室町初期に流行した一種の俗舞。白拍子が起源ともされる。

都から北陸道を通つて越後と越中国境、境川に着くまでの名所を詞の中に織り込む。

西方Ⅱ極楽浄土
十萬億土Ⅱ十萬億里の彼方にあるとされる。
弥陀来迎の直路Ⅱ善光寺の本尊である阿彌陀如来参詣の道である事。

道を極め名を立てて。世情萬徳(ばんとく)の妙花(みょうか)を開く事。此の一曲の故ならずや。然らば妾が名をも弔ひ舞歌音楽の妙文の。声仏事をもなし給はば。などか妾も輪廻(りんね)を離れて。歸性(きしょう)の善処(ぜんしょ)に到らざらんと。恨(うらみ)を夕山の。禽獸(とりけだもの)も鳴き添へて。声を上路の山姥が。靈鬼(れいき)これまで来たりたり。

シテ連 不思議の事を聞くものかな。さては真の山姥の。これまで来り給へるか。シテ 我国々の山廻りに。今日しもここに廻り遇ふ事。我が名の徳を聞かん為なり。謡ひ給ひてざりとては。我が妄執を晴し給へ。

シテ連 此上はとかく辞(じ)しなば恐ろしや。若し身の為や悪しかりなんと憚(はばかり)ながら時の調子を。取るや拍子を進むれば。

シテ しばさせ給へともさらば。暮るるを待ちて月の夜声に。謡ひ給はば我も亦。真の姿を現すべし。すはや陰るふ夕月の。さなきだに暮るるを急ぐ深山辺(みやまべ)の。

同音 暮るるを急ぐ深山辺の。雲に心をかけ添へて。此の山姥が一節を夜すがら謡ひ給はば。其時我が姿をも。現し衣の袖つぎて。移り舞を舞ふべしと。云うかと思れば其儘。かき消すやうに失せにけり。かき消すやうに失せにけり。

シテ連 餘りの事の不思議さに。更に真と思ほえぬ。鬼女が言葉を違へじと。ワ・連 松風共に吹く笛の。松風共に吹く笛の。声澄み渡る谷川に。手まづ遮る曲水の。月に声澄む深山かな。月に声澄む深山かな。

シテ あら物凄の深谷(しんこく)やな。あら物凄の深谷やな。寒林(がんにん)に骨を打つ。靈鬼泣く泣く前生(ぜんじょう)の業(ごう)を怨み。深野(人)や)に花を供する天人返す返す。幾生(きしょう)の善の悦ぶ。いやまこと善悪不二。何をか怨み何をか悦ばん。萬箇(ばんこ)目前の境界。懸河渺々(びょうびょう)として巖峨々(がが)たり山復山(やままたやま)。何れの工(たくみ)か青巖(せいがん)の形を削りなせる。水復水。誰が家にか碧潭(へきたん)の色を。染め出せる。

シテ連 恐ろしやさも物凄き宵の間の。月も木深き山陰より。其の様怪したる顔ばせは。いかさま先に聞えつる。其の山姥にてましますか。

シテ とてもはや穂に出て初めし言の葉の。気色にも知しめさるべし。我にな恐れ給ひそとよ。

シテ連 此上は恐ろしながら烏羽玉(むばたま)の。闇(くら)まぎれより現れ出づる。姿詞は人なれども。

シテ 髪には荊棘(おどろ)の雪を戴き。

シテ連 眼の光は星の如く。

シテ さて面の色は。

シテ連 さ丹(に)塗の。

シテ 軒の瓦の鬼の形。

シテ連 今宵始めて見る事を。

シテ 何に譬へん。

シ・連 古の。

同音 鬼一口の雨の夜に。鬼一口の雨の夜に。神鳴り騒ぎ恐ろしき。其の夜

世情萬徳の妙花を開く。風姿花伝に「世情萬徳の妙花を開く因縁なり」という詞がある。世間で妙花の如き高い徳望を得るという意。

声仏事。声を出して行う仏事。読経、音楽。輪廻。車輪の如く六道に流転生死すること。解脱の反対。歸性の善処。本覚真如(人間が本来持っている悟りの知恵が真理であること)の実性に還歸して赴く極樂の善所。

寒林。インドのマガタ国で死人を葬る地。阿育王譬喩品等に死人の靈魂が林野に歸り、現世で仏戒を破つて惡道に墮ちた者はその屍を鞭打ち、仏戒を保つて天人となつた者はその白骨に礼拝したとある。

深野。寒林に同じ。善悪不二。悟れば善悪も正邪も一如で差別はないという意。

山復山。以下和漢朗詠集大江澄明の句。山復山何工削成青巖之形、水復水誰家染出碧潭之色。

烏羽玉。黒・夜・闇といった詞の枕詞。

鬼一口の雨の夜に。伊勢物語六段芥川の段に雷雨の夜密かに連れ出した女を奪い返されたことを「鬼はや女をば一口にくひてけり」とあるを引いた。

を思ひ白玉か。何ぞと問ひし人までも。我が身の上になりぬべき。浮世語も恥づかしや。浮世語も恥づかしや。

シテ 春の夜の一時を。千金にも換へじとは。花に清香月に陰。これは思のたまさかに。行き遇ふ人の歌の一節。其の一刻もあたら夜に。早々謡ひ給ふべし。

シテ連 げに此上はともかくも。云うに及ばぬ山中に。

シテ 一声の山鳥（さんちよう）羽を敲く。

シテ連 鼓は瀧波。

シテ 袖は白栲（しろたえ）。

シテ連 雪を廻らす木の花の。

シテ なにはの事か。

シテ連 法（のり）。

シ・連 ならぬ。

同音 よし足曳の山姥が。よし足曳の山姥が。山廻りするぞ苦しき。

シテ それ山といつば塵土（ちりひじ）より起つて。

同音 天雲懸る千丈の峯。

シテ 海は苔の露より滴りて。

同音 波濤を畳む。萬水たり。

シテ 一洞（いっとう）空しき谷の声。梢に響く山びこの。

同音 無声音（むしょうおん）を聞く便りとなり。声に響かぬ谷もがたと望みしもげにかくやらん。

シテ 殊に我が住む山河の景色。山高うして海近く。谷深うして水遠し。

同音 前には海水瀼々（じようじよう）として月真如の光を掲げ。後には嶺松（れいしょう）歸々（ぎぎ）として。風常楽の。夢を破る。

遠近のたつぎも知らぬ山中に。おぼつかなくも呼子鳥の。声凄き折々は。伐木（はつぼく）丁々（とうとう）どして。山更に幽（かすか）なり。法性峯聳えては。上求菩提を現し。無明谷深きよそほひは。下化衆生を表して金輪際に及べり。そもそも山姥は生所も知らず宿も無く。唯雲水を便りにて到らぬ山の奥も無し。

シテ 然れば人間に非ずとて。

同音 隔つる雲の身を変え。假に自性を変化して。一念化生の鬼女となつて

目前に來れども。邪生一如と見る時は。色即是空其のまに。仏法有れば世法有り。煩惱有れば菩提あり。仏有れば衆生あり。衆生有れば山姥も有り。柳は緑花は紅の色々。さて人間に遊ぶ事。或時は山賤の樵路（しょうろ）に通ふ花の蔭。休む重荷に肩を貸し。月諸共に山を出で。里まで送る折も有り。又或時は織姫の。五百機（いはた）立つる窗（まど）に入つて。枝の鶯糸繰り。紡績の宿に身を置き。人を助くる業をのみ。賤の目に見えぬ鬼とや人の云うらん。

シテ 世を空蟬の唐衣。

同音 払はぬ袖に置く霜は夜寒の月に埋もれ。打ちすさむ人の絶間にも。千声萬声の砧に声のしで打つは唯山姥が業なれや。都に歸りて世語にせさせ給へと。思ふは猶も妄執か。唯打捨てよ何事も。よし足曳の山姥が山廻りするぞ苦しき。

シテ 足曳の。

白玉か何ぞⅡ同じく
伊勢物語六段で男が
悲しんで詠んだ歌
「白玉か何ぞと人の
問ひし時 露と答へ
て消えなましもの
を」。

春の夜の一時Ⅱ蘇東
坡の「春宵一刻值千
金 花に清香月有
陰」を引いた。

「木の花」は「なには」
を引き出す縁語。
なにはⅡ津の国の難
波の事か法ならぬ
遊び戯れ舞ふところ
聞け。

法性Ⅱ悟りの本体。
山に例えた。
上求菩提Ⅱ上に向
かつて菩提（正覺
の智慧）を求め。
下化衆生Ⅱ下に向
かつて一切衆生を教
化する。
金輪際Ⅱ仏教におけ
る須弥山の宇宙觀で
大地の一番下、水輪
に接するところ。

山廻。

同音

シテ

一樹の蔭一河の流。皆これ他生の縁ぞかし。ましてや我が名を夕月の浮世を渡る一節も。狂言綺語（きょうげんきぎよ）の道直に。讃仏乗の因ぞかし。あら御名残惜しや。暇申して歸る山の。

同音

春は梢に咲くかと待ちし。

シテ

花を尋ねて山廻。

同音

秋はさやけき影を尋ねて。

シテ

月見る方にと山廻。

同音

冬は冴え行く時雨の雲の。

シテ

雪を誘ひて山廻。

同音

廻り廻りて輪廻を離れぬ妄執の雲の。

シテ

塵積もつて山姥となれる。

同音

鬼女が有様見るや見るやと峯に翔り。谷に響きて今までここに。在るよと見えしが山復山に山廻。山復山に山廻りして。行くへも知らずなりにけり。

狂言綺語の道直に〓

和漢朗詠集白樂天の句に「願ハ今生世俗文字ノ業狂言綺語ノ誤ヲモテ 飜テ当来世々讃仏乗ノ因転法輪ノ縁トセム」

※喜多流謡本によるため実際の詞章と異なる場合があります。